

# 韓国の巫俗儀礼における舞踊

## — 東海岸別神祭の場合 (一) —

板 谷 徹

### 1

朝鮮の民間信仰である巫俗については、はやく赤松智城・秋葉隆の名著『朝鮮巫俗の研究』(1937)以来、日本からも民俗宗教・文化人類学の立場からの関心が寄せられて来た。近年には、張籌根『韓国の民間信仰 — 濟州島の巫俗と巫歌』、柳東植『朝鮮のシャーマニズム』、徐延範『韓国のシャーマニズム』、崔吉城『朝鮮の祭りと巫俗』など、韓国内で蓄積された調査と研究成果の一部がわが国へ紹介され、われわれも容易に韓国巫俗の実状を把握することが出来るようになった。韓国内では、これら宗教学・文化人類学からの関心ばかりでなく、演劇・舞踊の研究対象として巫俗儀礼を視野に入れた仕事が端緒につきつつあって、<sup>(1)</sup>その豊富な生きた資料は今後われわれ日本芸能史を研究する者に大きな刺激を与えることになる。

韓国の巫俗儀礼はその歴史資料をほとんど残さぬゆえに歴史学の介入を拒み、もっぱら民俗学的方法によるアプローチに頼るほかはなく、宗教儀礼に未分化に含まれている演劇・舞踊の要素を、未分化であるとの理由をもってただちに演劇史・舞踊史の冒頭に位置させることは出来ない。まず巫俗儀礼を現状において芸能性の視点から台本化し、そこから宗教儀礼における芸能的要素の役割を析出する必要がある。本稿もまた、東海岸一行に於ける別神祭と呼ばれる一種の部落祭を、そのような資料たらしむべく意図したものである。

### 2

韓国の巫俗は半島の全域にわたって分布するが、その巫俗儀礼はけっして均質のものではない。その質の差は巫俗儀礼を司祭する巫堂の質に由来するものであり、これを分類するために、巫堂の成巫動機によって、降神巫、世襲巫の概念が用いられる。降神巫は降神体験を経ることによってはじめて巫業に入る巫堂であり、これに対して、世襲巫は降神体験を経ることなく、世襲的に巫業を継承する巫堂で、降神体験の有無が、巫俗儀礼において果す巫堂の役割を異るものとしている。ここでは金泰坤『韓国巫俗研究』に示された、巫俗儀礼を司祭する巫堂による韓国巫俗の分類を紹介し、本稿の報告する巫俗儀礼の置れるべき位置をまず見定めることにしたい。

金泰坤は巫堂を大きく三種に分類し、それぞれ

の特徴を次のように列挙する。<sup>(2)</sup>

- A ムーダン型 (中・北部地域)
  1. 降神体験と靈力の所有
  2. 降神した「体主」神とその「体主」神を祀る神壇
  3. 神観の具体化 確信
  4. 歌舞による正統クッを主管する司祭
  5. 靈力による占ト
- B タンゴル型 (南部地域)
  1. 血統による司祭権の世襲
  2. 司祭権による一定地域の管轄権の継承
  3. 1. 2.が巫俗上制度化
  4. 降神体験・靈力がなく、具体的な神観の未確立
  5. 神に向って一方的な歌舞で正統クッを主管する司祭
- C シンバン型 (濟州島)
  1. 血統による司祭権の世襲、制度化
  2. 靈力の重視、具体化された神観の確立、自家の神壇なし
  3. 直接的な降神靈通なく、巫具を通して神意を知り、占ト
  4. 神に向って一方的な歌舞による正統クッを主管する司祭

Aのムーダン型の巫堂では、降神体験によって自分に降神した神を祀り(1・2)、巫業の修業に入り、巫俗儀礼を司祭するために降神巫と呼ばれ、Bのタンゴル型、Cのシンバン型の巫堂は、血統によって司祭権を継承して巫俗儀礼を司祭するゆえに世襲巫と呼ばれる。

これを地域的にみれば、Aは中部・北部地域、つまり忠清道・京畿道から北に分布し、Bは湖南地域つまり湖江(現在の錦江)以南の全羅南・北道に分布するタンゴルと、嶺東地域つまり大関嶺以東の江原道、嶺南地域 — 慶尚南・北道に分布するムーダン(嶺東・嶺南地域を合せて東海岸地方という)の二種に分れ、Cは濟州島に分布する。<sup>(3)</sup>

金泰坤はさらに中・北部地域のA型の巫儀を一元的形式、B・Cの南部地域の巫儀を二元的形式と規定する。中・北部地域では、

巫は聖域を象徴する祭儀場所で神の服を象徴する巫服を着て、神と宇宙の根源を明らかにす

る巫歌を唱いながら、神の動作を象徴する舞を通して神が降りる。神が体に降りれば、巫はすでに自身ではなく他者である神となって神の意図を言葉で伝え、「コンス」を下す。このようになれば、クツの絶頂である降神 — コンスの場面は巫と神が対坐関係にあるのではなく、巫は世俗から神聖へ没入して完全に神聖へ一元化して、クツが一元的祭儀形式となる。<sup>(4)</sup>

これに対して南部地域の巫儀では、巫服が衰退し、舞においてもわずかに跳舞降神の痕跡を残すのみで、

巫が世俗で神と対坐関係にあるので、神に対する一方的司祭者として祭儀を主管するために形式的儀礼が肥大して、祭場に神の下降路を象徴する大型の神竿が必需的にともなう。<sup>(5)</sup>

このために、東海岸地域では舞が発達し、湖南地域では巫儀にかかわる音楽 — 巫樂が発達して、「クツが儀礼に重きをおいて芸能化して行く」<sup>(6)</sup>ことになる。

巫儀に参加する人間（信徒）にとっては、降神巫は巫儀の中で神と合一して神意を告げるものであるが、世襲巫は神と合一することなく、人間の代弁者として神に対するものであり、降神巫の一元的巫儀は託宣を目的とし、世襲巫の二元的巫儀は祈願を目的とするともいえる。なお芸能的に巫儀の表現形態をみれば、降神巫の巫儀は、多くの神をその姿を象徴する巫服を身につけることによって降神が果されることから、仮装的であり、世襲巫の巫儀は、人間の祈願を神に伝達するために、まずそれぞれの神の職能・神威を人間の前に可視的なものとして示す必要から、その神の表現にあっては、歌舞・音楽を駆使した演戲的なものであるといえる。

本稿で報告する東海岸別神祭の事例は、世襲巫のBタンゴル型に属するムーダンの司祭する部落祭である。

### 3

慶尚南道梁山郡日光面利川里は釜山から海岸線に沿って北東へバスで1時間程のところにある。海岸に面した半農半漁の村で、633世帯、人口は約3,100人、農業のほかには海ではわかめの採取、いわし・さんま・ひらめ・ぶり・さわら・たいなどの沿岸底引き漁に従事する。

利川里の別神祭は行政単位の一つである里の主催する村落共同体の祭で、3年に一度の別神祭の執行は巫集団に依頼し、村民から選ばれた祭官<sup>(7)</sup>がこれに加わる。1983年2月27日から3月4日まで、6日間を要した別神祭の祭祀次第は次の通りであった。

— 1日目（2/27） —

- クツ竿の前（巫堂達の奏楽）
- 堂山（コンニビアル）
  - 堂迎えクツ
  - 各宅成造クツ
  - 世襲クツ
  - 天王クツ
- 海岸三ヶ所・共同井戸（龍王祭）
- コリテ城隍堂
  - 不浄クツ
  - 將軍クツ
- 石 堂
  - 不浄クツ
  - 將軍クツ
  - 世尊クツ
  - 成造クツ
  - 天王クツ
- 夫人 堂
  - 祖上クツ
  - 世尊クツ
- 2日目（2/28） —
  - 成造クツ
  - 夫人クツ
  - 天王クツ
- クツ竿の前
  - 門クツ
- 上堂（内席）
  - 祖上クツ
  - 世尊クツ
  - 帝釈クツ
  - 成造クツ
- 3日目（3/1） —
  - 軍雄クツ
  - 夫人クツ
  - 客様クツ
  - 天王クツ
  - 乞粒クツ
  - ファンジュクツ
- 4日目（3/2） —
  - 大王クツ
  - 大神クツ
- 上堂（外席）
  - 祖上クツ
  - 世尊クツ
  - 沈清クツ
- 5日目（3/3） —
  - 帝釈クツ
  - 龍王クツ（水源で）
  - 天王クツ
  - 龍王クツ（続き）
  - 山神クツ
- 6日目（3/4） —
  - 將師クツ

ウォルレクツ  
ヨンサン迎え  
テゴリ  
地神クツ

以上総計41席に及ぶ祭次は、宋東淑を中心とする総勢14名の巫集団——宋東淑牌によって行われた。<sup>(8)</sup>各祭次は女巫が1人ずつ交代で担当し、原則としてその夫が楽器のリーダーである杖鼓を受けもつ。

さて、この別神祭の語義については諸説あっていずれとも決し難い。宋錫夏は星神かとし、<sup>(9)</sup>柳漢尚は「儒教観念から雑神を意味したのか、或は地方であるから本神と呼べなかったのか」<sup>(10)</sup>とし、金泰坤は「特別な来客の意味で別神と呼ばれるのではないか」<sup>(11)</sup>とする。また巫夫である金石出は「村の『コルメギ』堂神とは別に、別の神——山で天王竿に『降神』を受ける神を迎え」るゆえ別神であると解釈する。<sup>(12)</sup>どの土地の別神祭も神竿による神降しを共通して行い、また各祭次で祀られる神は、土地の堂宇に祀られる神ではなく、普遍的な性格をもつ神である。

利川里にあって、前記の次第で見る通り、堂山にはじまり、海岸・共同井戸・コリテ城隍堂・石堂・夫人堂・上堂と、村内の堂宇を巡る次第にこの土地の信仰事情が反映しているものの、各祭次では在地の神ではなく普遍的な神を祀り、その内容も巫堂がどの土地へも持って廻る各自のレパートリーともいうべきものである。

祭初日の朝、上堂の広場（別神祭の祭場となる）の隅に立てられたクツ竿の前で、巫堂達が楽器を奏して神々と村人に別神祭の開始を告げる。その後、主巫を中心に、村内の堂山（コンニビアル）と称する小高い丘へ祭官、村人とともに登り、6・7メートル程の竹の先端に葉を残し、干魚とコカル（紙製の僧帽）を吊したコルメギ竿を立て、その下に祭物を並べて4席の祭次を行い、神々を招く。次に一同は海岸へ下り、海岸三ヶ所で海に向って巫歌と舞で龍王神を迎え、共同井戸の前では清水の豊富なことを祈り、次に村の入口にあるコリテ城隍堂に向う。ここには村内へ雑鬼・不浄が入るのを防ぐコリテ將軍神が祀られ、2席の祭次をする。次は石堂で、狭い空地に石を積んだだけのこの場所は、昔天馬に乗った將軍神が降りた場所と伝え、火事と盗難を防ぐこの神に対して5席の祭次がある。次は海辺に立つ夫人堂で、海の安全を守るハルモニ神が祀られ、5席の祭次がある。村内の堂宇を巡って2日目の昼にはじめて別神祭の会場となる上堂——村を守護するハラボジ神を祀る——に至り、堂の扉を開いて、巫堂達は庭で楽を奏して舞い、神々を上堂に迎え入れる門クツがあって、内席12席、外席12席の次第がはじめられる。

このように、「村の安寧と幸福のため、そして豊漁その他事業の繁昌を祈願する」<sup>(13)</sup>別神祭は、村の守護神を祀る上堂で行われながら、個人的個別的祈願はそれぞれの職能を分担し、巫堂の招来する神に対してかけられるところに、別神祭の特色がある。そして個人的個別的祈願はもっぱら上堂における内席・外席の祭次においてであり、同じ祭次を場所をかえて繰り返しても、その内容と意義は、上堂以前での祭次と上堂での祭次では異なることになる。その内容構成の変化を、世尊クツを例にとってみることにしよう。

#### 4

世尊クツは、僧クツ、日月迎えクツとも呼ばれ、釈迦牟尼の尊称である世尊を神と祀り、家族の生活と子孫の繁栄の守護を願う祭次である。この祭次には、請拝巫歌として唱われる叙事巫歌・タングメギや、巫堂に祭官や巫夫が加わって行う上佐遊び、泥棒つかまえ遊びのクンノリ（**구노리**）があるなど、芸術的要素が豊富で参会者にも人気がある。利川里の別神祭では、堂山・石堂・夫人堂・上堂の内席・外席と、都合5回行われた。このうち、まず堂山・石堂での世尊クツの内容構成を対照して示すと次の通りである。

<堂山>	<石堂>
舞	舞
礼	礼
請拝巫歌（旋舞）	請拝巫歌（旋舞）
焼紙	焼紙
跳舞（餅と盃）	跳舞（コカルと干魚）
跳舞（餅と神刀）	
跳舞（扇）	
辞説（コンスー神託）	辞説（同右）
除熬	舞（コカルをかぶり巫歌と舞）
飲福	飲福
焼紙	焼紙

その祭次を担当する巫堂は快子を着て、白の手巾を鉢巻にし、右手に扇と手巾、左手に手巾をもって、まず短い定型の舞を舞い、祭床に礼をする。次に祭床とは反対側に位置する杖鼓に向って神を請拝する巫歌（請拝巫歌）を舞を挟みながら唱い、終わると祭床の前で紙を焼き神意を占う。次に神刀・干魚や祭物の餅など、採物を次々とかえて上下動の多い跳舞を舞って神の降神を得る。これによって神は巫堂に憑依したとし、巫堂は参会者に神の言葉を伝え、サル（熬）を取り除き、酒によって命と福を与え、再び焼紙をして終わる。

堂山と石堂での世尊クツの内容は、簡略ではあっても、すでに巫儀の要件を満している。つまり、神を請拝し、その降神を求め、巫堂を通じて神意

を知る。にもかかわらず、参会者が上堂における祭次にくらべて重要視しないのは、東海岸の巫堂の巫儀では一般的に神の巫堂への降神が真正の憑依ではなく、形式的手続きに過ぎないので、そこに靈威を認められないからである。

石堂では、降神の後、堂山でみられなかった、コカルを被った舞がある。コカルは僧帽で世尊神を標示し、降神した世尊神の姿を表わす。上堂の祭次で巫儀の中心となる、演戲的なものによる神の具象化の萌芽ともいうべきであろう。各祭次の内容は同じ神を祀る同じ祭次であっても、堂山からコリテ城隍堂・石堂・夫人堂・上堂へ移るに従い、次第に巫儀の内容に演戲的なものを加え、所要時間も延びることになる。

次に、上堂の内席・外席における一般的な内容構成を示すと次の通りである。

<請拝>

舞 定型の短い舞 拝礼の舞  
礼

請拝巫歌 祭の執行を告げ、神を請拝する。

施舞 (巫歌の一節ごとに舞を挟む) 請拝の舞

巫歌 祝願文

焼紙 吉凶の占い

<降神>

跳舞 神刀・干魚をもつての舞 降神の舞  
降神 体をふるわせる。(形式的憑依)

神刀・干魚を祭官・参会者の肩におしつけ、サルを除く。

辞説 神の来由を説き、参会者に命と福を与える。 神格の舞

<遊興>

歌 民謡など。参会者の老婆達が巫堂とともに踊る。 遊興の舞

祝願 賽銭を出した人の祈願を神に伝える。

飲福

これによって見れば、上堂以前の祭次はほとんど、<請拝><降神>で終わってしまうが、上堂の祭次になると<遊興>が加わる。この時、別神祭の参会者の大部分を占める老婆達の中から、巫堂の歌う民謡に誘われて次々に祭場に踊り出し、一緒に乱舞する。ここに別神祭の祝願的性格——神に願をかけることを祭の目的とし、神を具現させるための巫堂の演戲を楽しみ、興募って神とともに遊ぶ——が顕著に現われてくる。

内席の世尊クツはほぼこの基本的構成に沿って行われた。石堂の場合と同じく、巫堂は右手に扇

と手巾、左手にコカルをもって巫儀をはじめ、請拝巫歌のあと、手巾を使ったサルプリ舞が入る。また、降神の後にはコカルをかぶり、辞説と巫歌と舞とで神の来由を説き、賽銭を出せば世尊神から命と福が与えられるだろうと参会者を促す。<降神>の降神後に神格を示す部分は、参会者の願を受けるところであり、巫堂は巫歌・語り・物真似・舞などの芸を尽し、参会者は願を賽銭のかたちで巫堂に託す。例えば沈清クツは、沈清伝を叙事巫歌として4時間程かけて語り通すだけの祭次であるが、眼疾なきことを願う参会者は、巫堂の語りの時の採り物——ソツテ(笹の枝)——が観客席に廻されると紙幣を枝に結びつけて願をかける。この賽銭は、宗教的であるとともに、巫堂の芸に対する纏頭でもあるという両義的性格を帯びている。

さて、外席の世尊クツになるともはや宗教儀礼としての基本的構成は失われ、前述の演戲が極端に肥大化することになる。請拝巫歌はタングメギの叙事巫歌として語り物化し、降神の手続きを省き、神格を示す2つの寸劇が演じられる。タングメギ叙事巫歌は次のような内容をもっている。

寺を出て村里に托鉢に出た僧が、タングメギという娘が独り留守番をする家を訪れ、ふとしたことで契りを結び、何方へとも知れず去って行く。帰宅した両親と兄弟は娘の不始末に驚き、懐妊した娘を山に追いやる。しかし母親は娘の身を案じて探しに行き、すでに三つ子を産み落した娘を家に連帰る。子供達は成長して書堂で卓抜な能力をみせるが父なし子と謗られ、父を求めて諸国を巡り、父に会って試練を受け、遂に父子の名乗りをあげる。父は実は世尊神の化身であり、のちに三つ子は三帝釈、母は産神となるという、世尊神の本生譚である。

このあと、巫堂はコカルを被り、長衫を着て舞い、また、嚙囉をもって舞う。利川里の別神祭では見られなかったが、ここで寺刹僧の生態を模写した物真似をすることもあり、世尊神の具現ではないにしても、仏教僧を表現した、神格の舞に準ずるものであろう。

さらに、巫堂は自分の着ていた、コカル・長衫・たすきを三人の祭官にそれぞれつけさせ、観客席を廻って托鉢をさせる<上佐遊び>があり、また、布袋をもった巫堂と祭官を村から福を奪って行く泥棒に見立て、巫夫達が村人に扮して追い廻し、滑稽・才談を交えながら泥棒から袋を奪い返し、中に入っている村の福——パガジ・餅・果物・穀物——を取り出して参会者に撒く<泥棒つかまえ遊び>をする。<sup>(14)</sup>

以上、堂山から上堂へ至る、宗教性の濃い祭次から娯楽性の甚だしい祭次への展開を、世尊クツを例にとって追ってみた。祭次の構成上、各段階に対応する舞踊の機能によって祭次の構成の意味

するところも理解できよう。ここであらためて、前表右欄に示した各種の舞踊についてまとめておく。

#### <拝礼の舞>

短い定型の舞で、拝礼の動作を舞踊化したもの。

#### <請拝の舞>

ゆるやかな旋舞で、巫歌の一節ごとに短く挟んで舞われるが、次第に巫歌の一節の量が短くなり、舞のみとなる。巫歌を装飾する舞。

#### <降神の舞>

降神巫の巫儀で神の憑依を準備する舞と同様、おもに神刀と干魚をもって跳舞する。この舞を数度繰り返した後、巫堂はぶるぶると体をふるわせ、降神を受けたとする。

#### <神格の舞>

神の姿をもって舞う旋舞であるが、降神巫の巫儀で、その全体がそれぞれの神を象徴する巫服を着た神格の舞であるのとは異り、世襲巫の別神祭の各祭次では巫服の衰退から事例は少い。むしろ神格の舞がより演劇的な結構をもったクンノリに代わられることが多い。

#### <遊興の舞>

拝礼の舞・請拝の舞・降神の舞・神格の舞が儀礼上の手続きであるのとは異り、参会者が主体となる舞で、定まった型はなく、肩をつかったゆるやかな乱舞である。

東海岸別神祭の巫儀における舞踊の位置と機能をこのように概括的に把握した上で、次稿では、舞の型の分析から、なお詳しく考察を進めるとしたい。

註(1) 李杜鉉「東海岸別神文」(『韓国文化人類学』13)。鄭炳浩「巫舞의 芸術的構造」(『創論』1)、徐洙昊「韓国巫劇의 原理와 類型」

(高麗大学校民族文化研究所『韓国巫俗의 綜合的考察』)など。

- (2) 金泰坤『韓国巫俗研究』P 143～5。
- (3) 金宅圭は「韓国の文化領域について」(『日本民俗文化大系』月報1)で基層文化から韓国を3つの地域に分類する。中・北部地域は端午圏、湖南地域は秋夕圏、嶺南地域は端午秋夕複合圏に相当する。
- (4) 金泰坤前掲書P 402。
- (5) 同上P 403。
- (6) 同上
- (7) 祭官は里内の住民から、定められた十二支の生れで、家内に不都合のない男性三人が選ばれ、住民の代表として別神祭に参加する。祭官は祭の前5日間潔斎し、別神祭にかかわる各堂宇の清掃と祭物の準備にあたり、祭の後1年間(昔は3年間)は結婚式・葬式・出産祝いなどの席に参列することが出来ない。
- (8) 現在、東海岸の巫集団には、金石出牌、金永達牌、宋東淑牌の3つがある。(『韓国民俗綜合調査報告書(農樂・豊漁祭・民謡篇)』)
- (9) 宋錫夏『韓国民俗考』
- (10) 柳漢尚「河回別神仮面舞劇台詞後記」(『国語国文学』20)
- (11) 金泰坤前掲書P 107。
- (12) 同上
- (13) 崔正如・徐大錫『東海岸巫歌』P 23
- (14) 崔吉城に「世尊의 神像과 『도독잡이』의 構造分析」の論文がある。

#### ※付記

本調査には、徐大達君が同行して調査を手伝ってくれた。記して謝意を表する。